

児童のイメージテストに対する反応 (2)

— 大学生との得点分布の比較 —

畠山 孝男
(山形大学)

Key words: イメージテスト, 分布, 児童, 大学生

児童を対象にしたイメージ個人差についての研究は Isaac & Marks (1994), Wolmer, Laor, & Toren (1999) などに限られ、ほとんどなされていないと言ってよい。しかもそこでは、成人向けに作られたイメージテストがそのまま児童に個別事態で施行されている。

筆者はこれまで、趣意を損なわない範囲で元のテストに修正を加えた児童版を作成して、学級単位の集団で施行し、認知課題や事象との関連の分析に活用してきた。畠山 (2018) はそれらの研究で施行したデータを用いて、児童のイメージテストに対する反応の特徴を把握するため、平均得点と相関係数について大学生と比較した。その結果、平均得点については、イメージ鮮明性、統御性、常用性(表象型)、没入性のいずれのテストにおいても、児童の反応が大学生より幾分評価が高いことが知られた。即ち、児童では大学生に比べて、概してイメージが幾分鮮明で、統御しやすい性質を持っており、言語化傾向も視覚化傾向も高く、想像活動への関与も大きいことを示すと見ることができる。

また相関係数については、鮮明性テスト QMI (7 感覚モダリティ) と VVIQ (視覚) は、児童、大学生とも .60 に近い係数を示していて、鮮明性が感覚モダリティを越えたモダリティ横断的な特徴を持っていること、鮮明性テストと統御性テストの間に、児童では中程度の相関、大学生では低い相関があり、児童における鮮明性と統御性の関連が大学生の場合よりも大きいこと、言語化傾向及び視覚化傾向と鮮明性、統御性のテスト間に、児童、大学生とも有意な低い相関が見られ、係数は児童の方が幾分大きいこと等が示された。

このように、児童は概してどの次元についても大学生より幾分評価が高く、テスト間の相関も幾分大きいことが知られた。本研究では児童と大学生のイメージテストの得点分布について検討する。

方法

調査対象者 分析の対象とした児童は小学 4 年生 195 名、5 年生 700 名、6 年生 206 名の計 1,101 名 (男 571 名、女 530 名)、大学生は 1,577 名 (男 656 名、女 921 名) である。対象人数はテストによって違っ

ている。

イメージテスト 7 感覚モダリティのイメージ鮮明性質問紙 QMI (Richardson, 1969 鬼沢・滝浦訳 1973 を修正)、視覚イメージ鮮明性質問紙 VVIQ (Marks, 1973 筆者訳)、視覚イメージ統御性テスト TVIC (Richardson, 1969 鬼沢・滝浦訳 1973 を修正)、言語型-視覚型質問紙 VVQ (Richardson, 1977 筆者訳)、想像活動への関与尺度 III (日本版: 笠井・井上, 1993) と、筆者によるそれぞれの児童版。児童版では QMI と III の 7 段階尺度を 5 段階に、TVIC の 3 件法を 2 件法にしている。

結果

図 1 から図 7 に、児童と大学生の各イメージテストのヒストグラムを、歪度、尖度を添えて示す。

QMI (図 1) は、児童は歪度、尖度とも大きめで、肯定側 (鮮明性が高い) に偏った分布を示し、中間値までの 35-105 点の間に 93.5% が含まれている。大学生も同じく 35-140 点の間に 96.6% が含まれているが、歪度、尖度とも小さく、コルモゴロフ=スミルノフ検定で正規性を示した。肯定的に反応する傾向は両群に共通するが、児童では高いレベルの鮮明度を示す者が大学生より多い。

VVIQ (図 2) は児童、大学生ともそれぞれ QMI と同様の分布を示す。児童は歪度がやや大きく、肯定側への偏りがあり、中間値までの 16-48 点の間に 90.4% が含まれている。大学生も同じく 79.3% が含まれていて、肯定的に反応する傾向は児童と共通するが、歪度、尖度とも小さく、正規分布に近いと言えるだろう。

TVIC (図 3) は児童、大学生とも歪度がやや大きく、肯定側 (統御性が高い) に偏っている。児童では満点が大学生より多い。

VVQ (図 4) は、言語化傾向と視覚化傾向を 1 次元の両端とする採点法 (言語尺度への否定的反応を視覚得点に加える) による得点の分布である。児童、大学生とも歪度、尖度が小さく、正規分布に近いと言えるだろう。VVQ-Verbal (図 5) は言語尺度の得点分布である。児童、大学生とも尖度がやや大きめである。VVQ-Visual (図 6) は視覚尺度の得点分布である。児童は歪度、大学生は尖度がやや大きく、

図は共に分布が視覚化傾向が大きい方向にあることを示している。

III (図 7) は児童, 大学生とも歪度, 尖度が小さく, 児童はコルモゴロフ=スミルノフ検定, シャピロ=ウィルク検定が, 大学生はシャピロ=ウィルク検定が, 分布の正規性を示した。

考察

児童で高いレベルの鮮明度を示す者が大学生より多い点を除いて, 各イメージテストとも児童の分布と大学生の分布は, 非常に似ている。鮮明性と統御性の評定が肯定側に大きく偏った分布を見せることについては, Kihlstrom, Glisky, Peterson, Harvey, & Rose (1991) が QMI, VVIQ, TVIC について, 大学生を対象にした大規模のデータで示した結果と同様である。加えて VVQ-Visual への反応も同様なので, イメージ生成やその使用傾向に関しては, 肯定的方向への偏りが普遍的だと言ってよく, Richardson (1994) の言う「人間が広く持つ」(species-wide) 特性であることを示唆している。畠山 (2018) の知見と合わせて, 児童のイメージテストのデータを大学生と同等に扱うことができると言える。

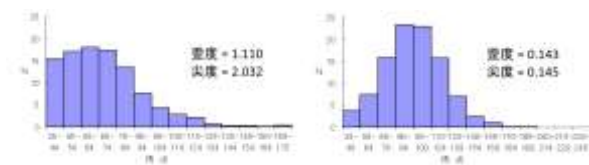


図 1 QMI 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

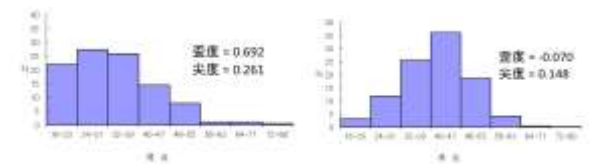


図 2 VVIQ 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

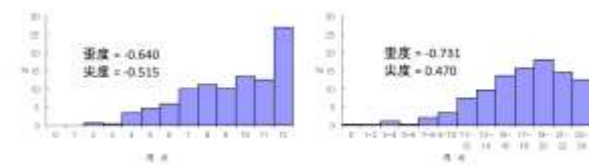


図 3 TVIC 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

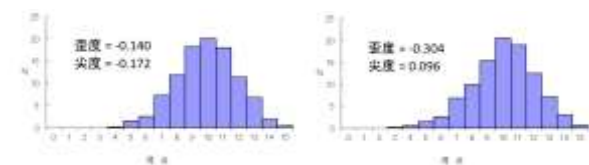


図 4 VVQ 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

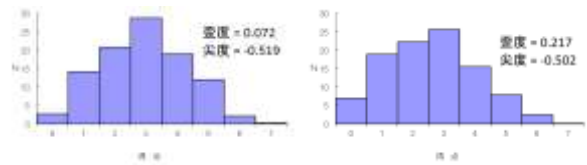


図 5 VVQ-Verbal 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

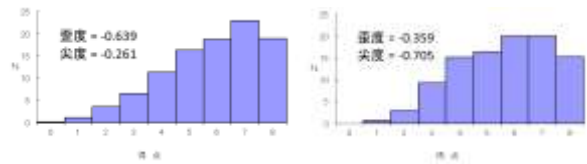


図 6 VVQ-Visual 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

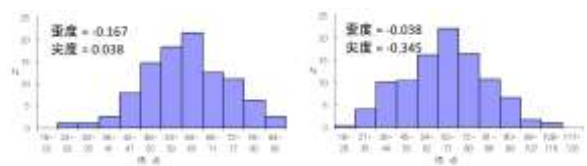


図 7 III 得点の児童(左)と大学生(右)の度数分布

引用文献

- 畠山孝男 (2018). 児童のイメージテストに対する反応—大学生との平均得点, 相関係数の比較— 日本心理学会大会発表論文集, 82, 1AM-070.
- Isaac, A. R., & Marks, D. F. (1994). Individual differences in mental imagery experience: Developmental changes and specialization. *British Journal of Psychology*, 85, 479-500.
- 笠井仁・井上忠典 (1993). 想像活動への関与に関する研究: 測定尺度の作成と妥当性の検討 催眠学研究, 38(2), 9-20.
- Kihlstrom, J. F., Glisky, M. L., Peterson, M. A., Harvey, E. M., & Rose, P. M. (1991) Vividness and control of mental imagery: A psychometric analysis. *Journal of Mental Imagery*, 15(3&4), 133-142.
- Marks, D. F. (1973). Visual imagery differences in the recall of pictures. *British Journal of Psychology*, 64, 17-24.
- Richardson, A. (1969). *Mental imagery*. London: Routledge and Kegan Paul. (リチャードソン, A. 鬼沢貞・滝浦静雄(訳) (1973). 心像 紀伊國屋書店)
- Richardson, A. (1977). Verbalizer-visualizer: A cognitive style dimension. *Journal of Mental Imagery*, 1(1), 109-126.
- Richardson, A. (1994). *Individual differences in imaging: Their measurement, origins, and consequences*. New York: Baywood.
- Wolmer, L., Laor, N., & Toren, P. (1999). Image control from childhood to adolescence. *Perceptual and Motor Skills*, 89, 471-485.